

未来^眼とうほく 第10回

常に新しさを求めてチャレンジが必要

2001年4月に東京大学第27代総長(旧制帝国大学、東京帝国大学時代を含む)に就任し、国立大学法人への移行期に大学改革で敏腕を振った佐々木毅氏。近著『学ぶことはどういふことか』(講談社)がベストセラーとなる一方、政治学者として国の審議会委員を務めるなど、現在も多方面にてご活躍中である。今回の対談では、教育や政治、地方分権などをテーマに、課題と今後のあるべき方向性についてお話をうかがった。

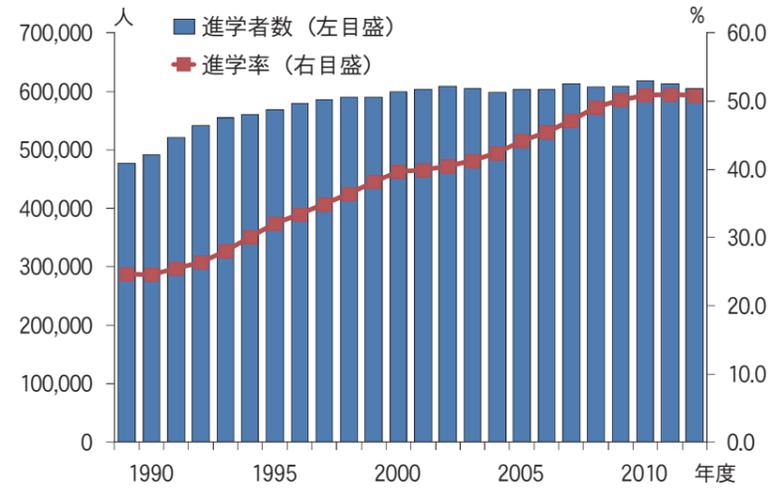
「ゆとり教育」は本当か

●町田 わが国の大学進学率が50%を超え、いよいよ大学の役割も変革を迫られる時代になりました。私も今年の4月から大学運営に携わることになりましたので、大学トップの先達である先生とは、まず教育の話から入らせていただきたいと思います。

- 佐々木 よろしくお願ひします。
- 町田 今年は、いわゆる「ゆとり教育」で育った子どもたちが大学に入学する年ということで、「ゆとり教育論」などがマスコミで取り上げられる機会が多かったように見受けられます。ゆとり教育の評価はさまざまですが、先生はどのように感じておられますか。
- 佐々木 なぜ「ゆとり教育」というものが、これほどまでにクローズアップされるのか、正直言ってよく分かりません。と申しますのは、私と議長は同じ世代ですが、私たちが受験生の頃は、私たちより上の世代はもっと詰め込み教育でした。しかし、私たちは「ゆとり教育」を受けたとは思っていません。
- 町田 思い当たる節があります。さらに、そのような世間から言われることもありませんね。
- 佐々木 これは、日本が歩んできた道のりと重なるのではないのでしょうか。つまり、これまでの日本、あるいは日本人はキャッチアップ(追いつけ追い越せ)の文化でした。そうした時代がひと段落したときに、すなわち、これからはキャッチアップばかりでなく、どうしようかという、いわば歴史の隙間で「ゆとり教育」というものが膨張したのではないか。そのように考えています。
- 町田 なるほど。おっしゃる通りかもしれませんね。

安定志向は誤った認識

- 町田 それともう一つ、大学選びに親の意向が一層強くなった気がいたします。日本が成熟化した今日、誤解を恐れず言えば、これからの日本は衰退していくと懸念される中で、大学を選ぶ基準が「大企業に何人就職したか」「公務員試験に何人合格したか」というような、ある意味で大学が就職の“つなぎ目”のごとくとらえられていると感じられてなりません。
- 佐々木 私もそう思います。安定志向が悪いとは言いませんが、あまりそれに縛られてしまうと、かえって人間の可能性を狭めてしまう可能性があります。極論すれば、安定を求める親のもとで、子どもは大変なストレスを感じながらがんばったのに、それがうまくいかないと何も残らない。そんな考えに陥ってしまう



資料：学校基本調査

図1：大学進学者数と進学率の推移

危険性があります。

- 町田 成績が良いに越したことはありません。しかし、経営者に話を聞くと、社員に求めるのは、まずコミュニケーション能力。それから国際語としての英語力。さらに、時代の変化に対する適応力と積極的なリーダーシップ。この4つぐらいで人物を評価しているようです。国公立大学出身だとか、偏差値の高い大学出身といった、そういう基準ではないのです。
- 佐々木 そもそも、私たちの世代は安定を得るためにがんばったわけではありません。確かに希望はあったかもしれませんが、でもそれは、いわばがむしゃらの裏返しで、ただがむしゃらに、生きるために働き、その結果、安定を得た。つまり、安定はただの偶然にすぎないのです。それを、私たちの次の世代、ですから今の学生の親世代と言えるかもしれませんが、その世代がどうも誤解してしまった。私たちが安定のために働いたと。だから、安定した社会が一番、安定した職業が一番という発想になる。私はこれが健全だとは思いません。
- 町田 非常に根が深い問題ですね。その辺りから、今一度教育というものを考え直す必要があるかもしれません。

教養教育の重要性

●町田 教育についてももう少し話をさせていただきたいのですが、私が学長を務める東北公益文科大学は、山形県の庄内地方にあります。それゆえ、地域の歴史を学ぶ機会があります。そこでまず、座学ではなく体験ということで、一つは、神道の流れをくむ羽黒山で

の修験道体験、もう一つは、曹洞宗善寶寺(鶴岡市)での只管打坐、つまり座禅、この二つをカリキュラムに加えたいと考えています。一方、座学でも、実は庄内地方は、歴史的に西郷隆盛と非常に縁が深いので、旧庄内藩士が西郷から教わった話をまとめた『南洲翁遺訓』という本をテキストにしたいと考えています。

●佐々木 それは非常に興味深いですね。ある種の教養教育だと思います。教養教育の型は一つではありませんから、何がその人にとって教養になるのかは、ぶつかる側、すなわち学生側の感性にもよります。したがって、いろいろなチャンスを与えて、それらに触れられる環境を作ることも教育の使命だと、私は考えています。

- 町田 これからはグローバルの時代で、今の学生が今後、海外の人たちと交わる機会も増えると思います。そのときに、日本とは何か、あるいは日本人とは何かということ、絶えず問われるでしょう。それゆえに、日本的な精神風土について知っておく必要があるということも、私が先に述べた教育を行いたいと考える目的の一つです。
- 佐々木 学生時代は、少々失敗しても、それで一生責任を問われることはありませんので、いろいろな新しいことにチャレンジすべきだと思います。何か体験



佐々木 毅 (ささき・たけし)
1942年、秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、東京大学法学部助手、同助教授、同教授、東京大学大学院法学政治学研究科教授、東京大学法学部長を経て、2001年4月に東京大学第27代総長に就任(2005年3月まで)。2005年4月より学習院大学法学部教授。法学博士。東京大学名誉教授。専門は政治学、西洋政治思想史。2011年より日本学士院会員。文部科学省中央教育審議会委員などを務める。



町田 睿 (まちだ・さとる)
1938年、秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、富士銀行に入学。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年庄内銀行取締役副頭取、95年取締役頭取、2008年取締役会議長を歴任。09年10月よりフィデア・ホールディングス取締役会議長・北都銀行取締役会長、11年6月より庄内銀行取締役相談役、12年4月より東北公益文科大学学長、同年6月よりフィデア総合研究所理事長を務める。

してみると、今まで知らなかったことが見えてきたりします。あるいは、新しい関心が生まれてきたりします。問題は、関心がないから体験をしない、ということでしょう。その結果「食わず嫌い」で終わってしまうのは残念です。

夢を売れなくなった政治家

●町田 次に、先生のご専門の政治についてお話をうかがいたいと思います。日本の政治を振り返りますと、賛否はともかくとして、かつては国民所得倍増計画とか日本列島改造論などといった“夢のある政策”が前面に出ていました。つまり、政治家は国民に夢を売ることができ、かつ、それを実現してきました。しかし、今日の閉塞感漂う時代においては、国民は夢を持ちにくく、政治家は夢を売りにくい状況にあると思います。単刀直入に言えば、政治家が“やりがいのある職業”ではなくなってきているのではないかという危惧を持っております。

●佐々木 私もそう思います。ところが、今の政治家は次々と実現不能な夢を上塗りして、実現できませんでした。失敗しましたと言って、自ら墓穴を掘っている。そんな悪循環に陥っている気がします。そのために、国民は夢よりも確実性を求める結果となっています。もっとも、これは日本だけの問題ではなく、アメリカやヨーロッパでも同じことが言えます。

●町田 確かに、グローバル経済で“地球”がどんどん小さくなっているのに、グローバルな政治はどこももたついている感じがします。

●佐々木 各国の政治が、もはや国内のことに精いっぱい、世界経済をどうする、あるいはルールをどうするという点について、善しあしはこの際置いておいて、覇権主義的責任感を持っている国がなくなってしまったのが現実だと思います。

●町田 戦後しばらくは、アメリカ、あるいは旧ソ連といった2つの圧倒的な軸があって、それらがグローバルな政治体制の後ろ盾を担っていました。今は、旧ソ連はもちろんとして、アメリカもそうした役割を降りかけているように見受けられます。

●佐々木 おっしゃる通りですね。

時間軸を定めて「決める政治」を

●町田 先生はマキャベリ（中世イタリアの政治思想家）の研究がご専門とうかがっておりますが、現代のわが国の政治課題とどのように結びつけたら良いでしょうか。

●佐々木 難しい質問ですね。ただ、彼が徹底していた主張は、政治は結果を出さなければいけない、権力は結果を出さなければいけないということです。結果を出すということは“決断する”ということです。一方で、民主主義においては、多くの人々から意見を聞く必要がありますので、なかなか物事が決まらないことも少なくありません。“決断する”ことが垂直的とすれば、民主主義は水平的感覚です。日本は民主主義国家ですから、率直に申し上げて政治の決断が遅いです。それに対して、国民の多くはフラストレーションを感じているのではないのでしょうか。もっとも、垂直的ただけでは独裁政治につながりかねませんから、垂直的な部分と水平的な部分とのバランスが重要になると思います。

●町田 これだけ人々の価値観が多様化してくると、新たな政治のルール、政治の仕組みを築いていくことも、必要ではないでしょうか。

●佐々木 とはいえ、選挙を度々すればいいというわけにはいきません。選挙は消耗戦ですから、政治家も疲れてしまいます。また、例えば、わが国では他国に比べて、閣僚が国会に出席する頻度と時間が多すぎます。会社に例えると、毎日のように株主総会や取締役会を行っているようなもので、これでは閣僚も疲れ果て、特に外交には万全の準備で臨めません。

●町田 もっともな例えかと思えます。つまり、社長（首相）も業務に専念できないと。

●佐々木 おっしゃる通りです。その要因の一つは、政治に時間軸の概念が希薄なことだと思います。最近の国会で法案成立の比率が低下していることも、その象徴でしょう。熟議は確かに重要ですが、やはり将来の一定の時期を基準に明確な時間軸を定め、それに向けていろいろな仮定を置きながら、最終的にズバツと決める政治が、これからは求められます。

●町田 ぜひそのような政治に期待したいですね。

中央に依存しない地方分権

●町田 私ども地方に職住を構えておりますと、どうしても地方分権の問題は避けては通れません。私の住む秋田県は、人口減少が最も激しく進んでいます。東北地方全体でも同じ傾向です。もはや、県がどうこうと言っている余裕はなく、東北というまとまりの中で、いかにマーケットを広げながら自立していくかが重要な課題と考えています。

●佐々木 地方分権も実は難しい問題です。議長がおっしゃるような分権論者もいれば、なんだかんだいっても中央依存で行きたいという分権論者もいて、

論調が一つにまとまっていないのが現状です。

●町田 私の考える地方分権とは、権限だけでなく、あらゆる経営資源、例えば人も分散させるということです。少々乱暴かもしれませんが、例えば中央省庁に集まる優秀な官僚の皆さんも、自分たちは東京育ちでも、世代をさかのぼれば、どこか地方にふるさとの人が多くいます。そうした官僚も地方に分散すれば、それぞれの地方が活気づいて自立する道を模索していくのではないのでしょうか。

●佐々木 少子高齢化の中で、地方分権の一つのネックは、社会保障を地方が自立してやっつけられるかということにあると思います。この問題をクリアしないと、議長がおっしゃるレベルまで地方分権を進めるのは難しいでしょう。とはいえ、今の政治システム、行政システムを変えていかなければいけないのは確かです。多少荒療治であっても、どこまでを公共がサポートして、どこから国民の自己責任とするか、政治がしっかりと線引きしなければなりません。真の意味で地方分権を達成するためには、ある程度、個人個人が背負わなければならないところも増えてくると思います。先の話と矛盾するかもしれませんが、そのための代償として、政治が人々に“夢”を与えることも必要でしょう。

●町田 なるほど。今のお話は、地方の側でも覚悟を持たなければ、真の分権は達成できないという議論につながると思います。それから、先ほど先生がおっしゃったように、中長期的展望にたつて、それまでにどのようなことが起きるのか、また、そのために何をしなければならぬのか、ということ、国政だけでなく、地方の政治も真剣に考えなければならぬと痛感いたします。

GDPの順位にこだわる必要はない

●町田 再び話を国レベルに戻しまして、最後に、今後の日本の目指すべき方向性についてお話をうかがいたいと思います。戦後の日本は、驚異的な高度成長によって、GDPでアメリカに次ぐ世界第2位の経済大国となりましたが、2010年には中国に抜かれてしまいました。長期的には、ブラジルやインドといった新興国にも抜かれるという予測もされています。そうした中、これからの日本はどうなるのだろうかと不安を感じる国

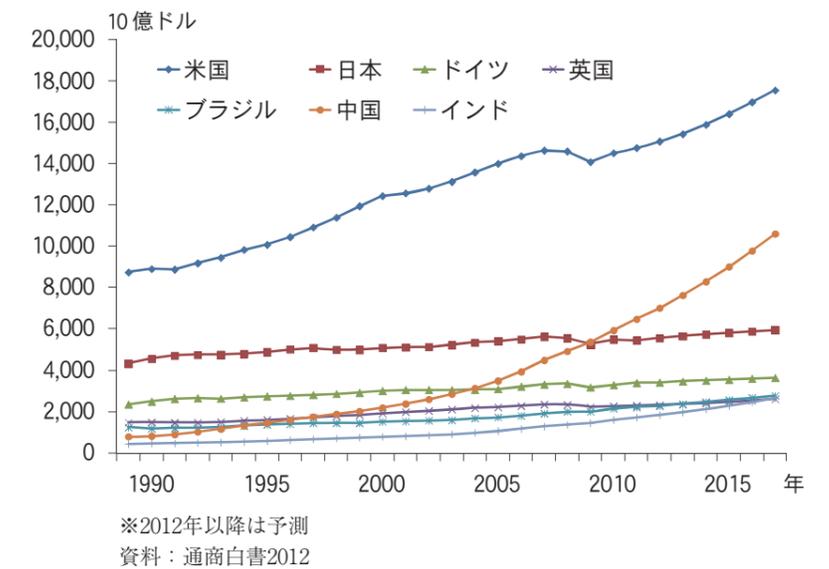


図2：世界主要国の名目GDP

民も多いかと思えます。

●佐々木 結論から申し上げます、日本はもうGDPの順位にこだわる必要はないと思います。今、日本がなすべきことは、少子高齢化によって著しくゆがんだ人口構造の変化に対して、悲観的ではなく品位を持って社会的に取り組むことだと思います。品位とは、国民がみな長生きし、堂々と人生の最期を迎えられるような社会を協力して作ること、そして、そういう社会を持ち得たことを、世界に誇れるようにすることです。思想的なところもありますが、これは、私が長年提唱していることです。

●町田 私も常々、日本人がずっと古くから持っていた、ある種の倫理や道徳といったものをもう一度見直し、日本を世界に尊敬される国、国民が誇りを持つる国にすることが重要だと感じており、先生のお考えには全く同感です。

●佐々木 砕けた言い方をすれば、がんばって、一定のところ安定して人生を全うしました、という話は過去のものとして、一生をかけて、新しいことに何度もチャレンジして大往生しました、という社会の仕組みを作ることです。そのためには、教育も政治も頭を切り替えなければならない部分が多々あるかと思いますが、それが達成されれば、日本は必ず世界の先進モデル国になれると確信しています。

●町田 今回の先生とお話から、これからは人も国も地方も、前に向かってチャレンジしていかなければならないという“共通項”を見出すことができました。本日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。